英国セントマークス病院研修レポート

田島陽介

平成二十八年十月八日より十一月五日まで、英国ロンドンのセントマークス病院で研修をさせて頂いた。セントマークス病院の特色・歴史については昨年当科の亀山仁史Dr.が詳細をすでに報告されているため、ご参照頂きたい。今回私は、ロンドン滞在中の雑感を記載させて頂く。

ロンドンとその周辺を含む地域は、City of Londonと称されるイギリスの政治・経済・文化の中心となっている。人口八百六十万人のうち実に半数が移民である。折しもBrexit宣言直後であり、アメリカでトランプ大統領が誕生する直前だったが、非常に平穏で落ち着いた印象であった。一方で、多民族都市ゆえなのか、どこか他人に無関心である雰囲気があり、様々なrootsの民族が英語というtoolを通じてゆるやかにつながっている集合体のようであった。

イギリスの医療制度で特徴的なのはSpecialist Nurse制度である。病棟のSpecialist NurseはRed shirtsと呼ばれ、採血・点滴・処方・検査を自分の判断でオーダーできる。他にも上部消化管内視鏡検査やS状結腸鏡検査を施行できるSpecialist Nurseや鼠径ヘルニアなどの手術を執刀できるSpecialist Nurseが存在する。もちろん責任は上級医師であるConsultantが負うことになるが、医師の負担の軽減に一役買っていることは間違いない。

セントマークス病院は世界を代表する大腸肛門疾患専門病院である。様々な困難症例が集まり、最高難度の手術が日常的に行われている。印象

的だったのは、直腸癌の骨盤内再発に対する仙骨合併切除を伴う骨盤内臓全摘の症例である。朝から始まったその手術は、執刀医が「疲れた」という理由で手術を中断し、患者は閉創しないままＩＣＵに運ばれた。そして翌朝再度手術室に戻され、何事もなかったかのように手術は再開された。手術は成功し、患者の経過は良好であった。この英断に、私は衝撃を受けた。

セントマークス病院の大腸癌手術は八割が腹腔鏡手術であった。一方、ともに学んだ研修仲間の母国であるギリシャ・スペイン・クロアチア・中国等では未だ多くが開腹手術であるといった実情を聞く機会も得られた。手術に限らず、日本国内ではよく日本と欧米との「標準治療」の違いが取り沙汰されるが、各国で思った以上に「標準治療」に違いが存在することがわかった。自分の行う治療が、あらゆる面で正しいことを絶えず確認する必要があると感じた。

最後に、当科若井教授をはじめ教室員の皆様、外科同窓会の先生方、医局スタッフの方々、家族などお世話になった全ての方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（平成十九年入会）